
キミとボクと彼女と僕

霜月ロク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミとボクと彼女と僕

【Nコード】

N6520B

【作者名】

霜月ロク

【あらすじ】

ボクが彼女にしてあげられること。なにかを贈ることも、なにかを言ってあげることでもない。ただ 約束を守ることだけ

前編（前書き）

前後篇の二部作です。

初めての作品で拙い文章力で申し訳ないのですが、それでも読んでいただけると嬉しいです。

叱咤激励、感想、ありましたらお伝えください。

今後の精進の糧にしていきたいとおもいます。

前編

「あたし、もうダメなんだって」

普段となにも変わらない口調で、彼女は、ただつぶやくようにそう告げた。

怒りも、悲しみも、ひとかけらの恐怖も――

なに一つ浮かべることのない無感情ともいえるような表情で

ただ事実を告げた。

「ううん、違う。あたしはもうダメなの」

それをボクはただ聞いていた。

特別に驚くことも、悲しむことも、せず

いつもと同じように、ベッドの隣で彼女を見つめながら。

「先生も、両親も、あたしの身体はだんだん良くなって、っていつもいってるけどそれもウソ。自分の体は、自分が一番わかるもの」

なぜボクは驚かなかつたのだろう。

いつかきつとよくなるよ、と彼女を励ます為に

ボクは毎日、彼女の病室に通つてたというのに

「この前先生が話してるのも聞いちゃったし。もともと悪かつた所から、もうずいぶん転移してる。もつてあと一ヶ月、もう助かる見込みはないだろう、だつてさ」

もしかすると心のどこかで認めてしまつていたのかもしれない。

いつまでたつても病状が良くならない彼女を見つめ続けてきて

もしかしたら、という

思つてはいけない憶測を。

「　　ねえ、ひとつだけ……いいかな？」

開け放たれた窓からはいつてきた風が彼女の髪を揺らした。

優しくたなびくその流線が、なぜか無性にせつなくて

なぜか、無性に儂かつた。

そんな彼女を見つめてボクは

ただ頷いた。

彼女をただただ肯定してたくて

「あたしは桜の花が好きだったの。暖かい季節になると薄桃色の花を咲かせて、周りを、街を、人の心を優しい気持ちにさせてくれる。そんな花だから」

今はまだ見ることのできない花の名を彼女は静かに告げた。

それは彼女が前々よりいつていた、彼女の口癖。

いつも無表情に見える彼女も、それを言うときには必ず、その顔に少しばかり感情を浮かべていた。

だから

「いまはまだ見れないけど、でもこの部屋から桜の木がみえるの。広場にみえる大きな木、きっと咲いたらここから見える景色もかわるよ」

いや、違う。

いつでもどこでも彼女とボクは近くにいた。

みんなは彼女のことを鉄面皮っていうけれども、ボクにはそうは見えなかった。

彼女は、些細なことでも感情を揺らしてその表情を変えていた。ただ、人にはそれが見えにくかったただけなんだ。

近くにいるからこそ、ボクにはその変化がわかるんだ。

だから、

「もし、春になってここが満開の桜景色になったらさ。桃色の並木道になったらさ」

彼女の目が、口元が、頬が

彼女の、

彼女自身の、全てが

「その時は『あたし』をつれてお花見に連れてって。あたしと、あなたの、二人つきりで」

分かってしまったんだ。

彼女が、内に渦巻く不安に、恐怖に、悲しみに
体をうち震わせるように

ただただ大きな声で

泣いている、ということが

「約束、してくれる?」

そんな彼女の願いに

いや、叫びに

僕は

「わかった」

逡巡することなくただ頷いた。

そう、考えることなんてないんだ。

「約束するよ。」

彼女の髪を揺らしていた風が二人の間をすり抜ける。

その流れは僕らを温めることなくただただ流れていく。

それはまだ温かみを帯びない

冬の風。

「きっと、キミを連れていくよ。あの並木道まで、あの桜の下まで」

彼女の瞳を見つめ、僕は彼女に誓った。

いつのまにか握っていた彼女の手から、彼女の体温が流れてくる。

これが、彼女のこれが

「キミの、手を取って」

これのぬくもりが僕にとっての 春なんだと、そう伝えたくて

僕は、彼女の手を握り続けた。

どれだけの時間がたったのかもわからない。

まるで僕と彼女だけ時間の輪から外されたように、僕たちの時間はただゆっくりと過ぎていく。

ふと一瞬、ほんの一瞬だけ刻が動き出した。

「 ありがとう」

消えゆるような、本当に小さな声で彼女はただ一言そうつつぶやいた。

彼女の頬をわずかな一筋がつつた。

「本当に ありがとう」

彼女は握っている僕の手を強く握り返してきた。

僕はそんな彼女をただ見つめ続けた。

頬をつたった一筋の涙が、白いシートへと零れ落ちる。

白へと広がったほんのわずかなシミが、ゆっくりと消えていくように

僕らの時間もまた、ゆっくりと止まっていった。

僕たち以外に誰もいない。

音も、流れも、そよ吹く風も

そう、僕たちだけの

永い永い風が過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6520b/>

キミとボクと彼女と僕

2011年1月7日17時49分発行